

徳島県のナシ産地におけるヒメボクトウに対する 交信かく乱剤の広域処理の試み

中西友章¹・遠藤隆行¹・今井健司²・徳永忠士³

(¹徳島県農総技支セ高度技術支援課, ²同資源環境研究課,
³同鳴門藍住農業支援センター)

徳島県内のナシの結果樹面積は230ha, 収穫量は6,370t(H25年産:農林水産省、作物統計>作況調査)で鳴門市, 松茂町, 藍住町などで栽培され、“幸水”と“豊水”で面積の殆どを占め、両品種にほぼ2分させる。このうち旧吉野川沿いの地域でヒメボクトウによる被害が問題となっている(中西、2005)。本種は蛾の一種で、幼虫がナシの枝幹に集団的に穿孔食入するため、樹の衰弱やひどい場合は枯死を招く。

幼虫期の防除対策には、被害枝の剪除ならびに粉碎等の処分、昆虫寄生性線虫スライナーネマ・カーポカプサエ剤による樹幹注入または木屑排出孔を中心に薬液が滴るまでの散布がある。近年、フルベンジアミド水和剤が登録され、ふ化〜若齢幼虫の防除を目的に枝幹部に十分量を散布すると防除効果が認められる。

成虫期の防除対策では、今後、実用化が期待される技術として合成フェロモン剤(以下、ディスペンサー)を利用した雌雄間の交信かく乱がある(Nakanishi, T., et al. 2013)。徳島県内の少〜甚発生ナシ園において、2011年〜2013年にディスペンサー(信越化学工業(株)製)を100本/10a設置し、その効果を検討した結果、フェロモントラップによる誘引阻害率は、3カ年ともほぼ100%であった。また、3年目には樹当たり蛹殻数が低下し、被害樹率についても、低下する傾向が見られた。これらのことからディスペンサーを3年連続して設置することにより、被害の低減効果が認められている(中西ら、2014、講要)。

しかし、これらの交信かく乱の試験は、いずれも小規模(10a程度)の試験であることから、本年、徳島県のナシ産地において、広域で交信かく乱剤を用いた試験を行うこととした。本発表では、この取り組みについて紹介する。



写真1 ヒメボクトウ成虫



写真2 生産部会での交信かく乱防除の講習